

日本近代詩鑑賞

大正編

吉田精一

創拓社

日本近代詩鑑賞

大正編

江蘇

工業學院圖書館
藏書章

吉田精一

創拓社

吉田精一 よしだ・せいいち

一九〇八年、東京に生まれる。

東大国文科を卒業。

東京教育大学、東京大学などで日本近代文学を講じる。

明治文学会の幹事として活動、また日本近代文学会の創立に参画し、代表理事も務めるなど、戦後の近代文学の研究を主導しつづけた第一人者である。

一九八七年、死去。

著書——『自然主義の研究』『明治大正文学史』『現代文学と古典』『鑑賞と批評』『随筆とは何か』など。

© Seichi Yoshida

日本近代詩鑑賞〈大正編〉

一九九〇年六月一日 第一刷発行

著者 吉田精一

発行者 井吹 晋

発行所 株式会社 創拓社

東京都千代田区神田神保町二―三八
稲岡九段ビル六階 〒一〇一

TEL 〓〇三・二八八・七一〇〇
FAX 〓〇三・二八八・七一六四

振替 〓東京七―五八五五〇

図書設計 道吉 剛・大熊 肇

印刷・製本 大日本印刷 株式会社

本文用紙 三菱製紙 株式会社

万一、落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします。

ISBN 4-87138-092-0 C0095

1990, Printed in Japan

日本近代詩鑑賞〈大正編〉*目次

木下 空太郎 きのしたもくたろう

該里酒^{セリイ}……………9

冬の夜の煖炉の
湯のたぎる静けさ。

両国……………25

両国の橋の下へかかりや
大船は檣を倒すよ、

高村 光太郎 たかむらこうたろう

根付^{ねつけ}の国……………43

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、
名人周山の彫った根付の様な顔をして、

冬が来た……………53

きつぱりと冬が来た
八ツ手の白い花も消え

秋の祈……………68

秋は唳唳と空に鳴り
空は水色、鳥が飛び

米久^{よねきう}の晚餐……………80

八月の夜は今米久にもうもうと煮え立つ。

室生犀星 むろうさいせい

ふるさとは……………99

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの

寂しき春……………112

したたり止まぬ日のひかり
うつうつまはる水ぐるま

靴下……………123

毛糸にて編める靴下をものはかせ
好めるおもちやをも入れ

松が枝に……………137

わが見しものは松が枝にきゆる離なきむらしぐれ
金沢に来しより幾月ぞ

萩原朔太郎 はぎわらさくたろう

猫……………153

まつくろけの猫が二匹
なやましいよるの屋根のうへで

艶^{なま}めかしい墓場……………163

風は柳を吹いてゐます
どこにこんな薄暗い墓地の景色があるのだらう。

小出新道……………174

ここに道路の新開せるは
直として市街に通ずるならん。

日夏耿之介 ひなつこうのすけ

道士月夜の旅……………190

小慧しい黒猫の柔媚の声音
青ざめた燐火をとぼすあたたかなその毛なみ

西条 八十

さいじょうやそ

七人

蜜蜂小屋の前に

七人の男が眠つてゐた

209

芥川 龍之介

あくたがわりゆうのすけ

相聞

また立ちかへる水無月の
嘆きを誰にかたるべき。

228

佐藤 春夫

さとうはるお

秋刀魚の歌

あはれ

秋かぜよ

249

春のをとめ……………269

しづ心なく散る花に
なげきぞ長きわが袂

望郷五月歌^{どくわつか}……………279

塵まみれなる街路樹に
哀れなる五月来にけり

佐藤惣之助 さとうそうのすけ

宵夏……………301

しづかさよ、空しさよ
この首里の都の宵のいろを

索引

〈解説は昭和編に掲載〉

＊本文は新字体・現代仮名づかいに改めた。
ただし、引用文は旧仮名づかいのままとした。

木下 奎太郎

きのした もくたろう

木下 奎太郎

・
・
・
・
・
・
・
・
・

本名は太田正雄。「きしのあかしや」「北村清六」「地下一尺生」等とも号す。明治十八年八月、伊豆伊東に生まれた。第一高等学校を経て東京帝大医学部卒業。明治四十年まだ在学中、ながた長田秀雄の紹介で新詩社に入り、「明星」に詩歌を発表した。又四十二年「スバル」の創刊に際して、その同人となった。黒田清輝等に絵画を学ぶ一方、詩及び戯曲を書き、絵画に於ける印象主義の理論、手法、江戸音曲の情趣、言葉などをとり入れることを計った。又、評論家、美術批評家としても名があった。詩集「食後の唄」うた（大正八年）のほか「和泉屋染物店」「南蛮寺門前」等の戯曲集、「唐草表紙」からくさ「穀倉」こくそうの小説集及び「印象派以後」「地下一尺集」以下の評論随筆集、「木下杢太郎詩集」（第一書房版）がある。大学卒業後、南満医学校教授となり、その後ドイツに留学、勉学の傍ら南蛮文化の日本渡来のをとを研究した。大正十三年帰朝。医学博士となり、愛知医大教授、東北帝大教授を経て東京帝大教授となる。昭和二十年十月十五日、胃癌の為死去。享年六十一歳。

該里酒^{セリイしゆ}

冬の夜の煖炉^{ストーブ}の

湯のたぎる静けさ。

ぼつと、やや顔に出たるほてりの

幻覚か、空耳かしら、

該里玻瓈杯^{セリイグラス}のまだ残る酒を見いれば

ほのかにも人の声する。

ほのかにも人すすりなく。

「え、え、ま、あ、な、に、ご、と、

ぞ、い、な、……あ……」と

さう云ふは呂昇ろしやうの声か。

この春聴いた——京都の寄席の、

それをきいて人の泣いたる——。

乃至ないしその酒のしわざか。

冬の夜の静けさに

褐あかく澄む、該里セリイの酒。

さう云ふは呂昇の声か、

乃至その酒のしわざか。

幕あけて窓から見れば

星の夜の小網町河岸

舟一つ……かろき水音。

（鴻の巣の主人に）

詩人木下奎太郎の名は、その詩友白秋にくらべて世に聞こえていない。泣菫^{きゆうきん}、有明^{ありあけ}、鉄幹^{てつかん}、晩翠^{ばんすい}らに比べても、一般的に知られてはいない。しかし彼は稀有^{けう}の才能である。明治末期から大正初期にかけての、詩、戯曲、小説、評論壇に於ける彼の仕事は注目すべきであり、且つその影響も目立たぬが大きいものがある。そうして各種にわたった業績の内、詩人としてのそれは恐らく最も永遠性があるであろう。その性質、内容に於いて、余人にない独特のものがある。詩人、文芸家を職業とせず、生活の第一義的な目的としなかったからといって、不当に評価すべきではない。詩の絶対価としても、初期の白秋の諸作に必ずしも遜色^{そんしよく}なく、むしろ白秋の方が、奎太郎に影響されているふしも見える。明治末期の教養者の精神の志向や情緒やは、もっともよく奎太郎の詩に代弁されているともいい得るのである。かたがた、ここにその詩について語ることにする。

奎太郎の詩集で単行されたのは「食後の唄」(大正八年)があるきりで、後に第一書房から思い切った豪華版で「木下奎太郎詩集」が出たが、こうした詩集の出版の機会にめぐまれなかったのも、彼の著名たり得なかった一理由であろう。しかも「食後の唄」は明治末期の作品を主としてあつめた為、既に詩風のうつった大正中期には、あまり問題とはならなかった。これは作者の不幸であった。ここにあげた詩は「食後の唄」に収められた、彼の傑作の一で、

はじめ四十四年一月、雑誌「スバル」に載った作品である。「食後の唄」序文で、李太郎は次のように云っている。この作の文化史的背景を解説することになるので、すこし長いが引用して置こう。

千九百十年は我々の最も得意の時代であつた。「パンの会」は毎週開かれた。我々は Rodin の銅像の首の唇に寄せた皺の粘さが何う云ふ情を蔵くしてゐるかが分るほどになつた。また亜刺比亜物語や、近松、三馬などに出て来る青年の心に同情を寄するほどの苦勞も覺えた頃である。毎日同じ仲間と交遊して、作詩し、作劇して日を暮した。予は劇の形式を以て印度の太子の心に洵いた、解け難き苦患を訴ふると同時に、小さい歌曲を以て、如何に東京の五月の美しく、舶来の酒の香しきかを歌つた。「屋上庭園」第二号の発売禁止を食つたのも此年である。

そのころ日本橋も小網町のほとりに鴻の巣と云ふ酒場が出来た。まづまづ東京最初の Café と云つても良い家で、（尤も主人はバア、キヤフェなどと呼ぶるを厭うて、その菜単には Maison Kônosu などと刷らせた。）その若い主人は江州者ながら、西洋にも渡り、世間が広く、道楽氣もある氣さくな亭主であつた。亭主は Conqueville の漁人ならぬ我々

にも如何に *Curacao* の精神を快活にし、如何に *Gin* の人の心を激怒せしむるかを教へた上に「まづ酒杯の形にもいろいろあります。それを一つお目に掛けませう。」と云つて、小さいのは該里の、これは紅葡萄酒杯、これは白蒲桃杯と、一つ一つ手に挙げて無足杯、鶏尾杯、璃球児杯の数々を示説した。それは冬の夜のことで、華奢な火炉には緑色のえなめるの花が光り、外は外として東京の河岸らしい響のする中に、昔の浦里時次郎を物語る夜樂の通らうといふ時であつた。そこで予は乃ち立ち立ろに一曲を作つて主人に贈つた。

「冬の夜の煖炉の

湯のたぎる静けさ……」

に始まる該里酒の歌がそれである。

それからとりどりに「金粉酒」「菊正宗（両国）」「薄荷酒」等を作つた。

油絵で複写した江戸錦絵のやうな、*Pierre Loti* の *Chrysanthème* のやうな、さう云ふ不純な氣分を愛する予は、寄席のかへり、芝居のかへり、また常盤木倶楽部、植木店のかへりみちに、この種の異香の酒を嘗めて、かの卑しい、然し涙に満ちた、江戸平民芸術の連想に耽ることを楽しみにした。

——「食後の唄」序

以上で大体この詩を作った作者の感興が、どういう方向に注がれていたかが明瞭であろう。この文にすこし註釈を加えるなら「パンの会」とは、ギリシャ神話の Pan（牧羊神）のこと、四十一年末ごろから、詩人、画家、文人等が時をきめて集まり、歓談酔語に夜を徹した集会であつた。今その案内状を例にとると（四十三年十一月二十日、人形町の西洋料理店三州屋で開かれたもの）、

物の音の悲しい時になりました。いのちの自覚もパンの笛のやうに身にしみる時になりました。それと同時に葡萄は熟し、新しい米も稔つて、酒とキイヌムの薫る時になりました。またバコスを祝ひませう。それに今度石井柏亭君は歐洲見学の途に就き、長田秀雄君と柳敬助君とは入営することになりましたから、その送別会を致し度く、それや是れやを兼ねてまたパンの大会を、紺の暖簾のれんのにほひも懐しき日本橋の真中で開くことにしましたから何卒御出席下さい。

とある。「Rodin の銅像の首の唇に寄せた皺」とは、当時雑誌「白樺」同人がロダンに浮世絵を送り、その礼としてロダンから贈られたゴロッキの首のことで、ロダンの本物とて若い美術家や詩人文人に大さわざをされ、展覧会が催されたことがあつた。それをさすのである。